

白 杉 庄 一 郎
『独占理論の研究』

ミネルヴァ書房 1961年 390+2 ページ

本書は故白杉庄一郎教授が過去数年間独占に関連して書かれた諸論文を一本にまとめたものであるが、はからずも教授の最後の著作となってしまった。この著書における教授の意図は、『資本論』以後における資本主義の発展を理論的に総括するような独占資本論のための足固めにあった。教授はさし当りの目標として『資本論』第1巻の発展として独占資本の生産過程を理論化した独占資本論第1巻をかかげておられる。それが果して可能か否かについて筆者は疑念なきをえないが、それはそれとして教授の死によって本書の内容が一層の展開をみる機会が失われたことは全く遺憾というよりほかない。

そのような理由で、本書はいわば序説的段階に止まっている。本書の構成は、第1章「独占資本主義のもとでの剰余価値の法則」についての主論文につづいて、第2章では教授の理論にたいする「異説と批判に答えて」を取扱い、第3章ではこれまた第1章での展開から必然的に問題となる「独占利潤の差額地代的性格に関連して」宇野説、向坂説を批判している。第4章はシュンペーター、ガルブレイスらの独占理論の批判的紹介であって、著者自ら認めているようにそれ以前の諸章と直接の関連をもたない、いわば「第1章で打建てられた理論の実証を目的とした渉獵の副産物と云われるべきもの」である。このことからみても、この短い書評においては、専ら第1章をとりあげることが妥当であろう。

教授はまずいわゆる最大限利潤が現代独占資本主義の推進者であると指摘し、この最大限利潤が独占資本主義のもとでいかに固定化されるかを明らかにせねばならぬといわれる。この際重要なことは、独占利潤の基本的源泉が生産過程にあることの再確認である。スターリンのいわゆる最大限利潤の法則の通俗的解説は、独占利潤を殆ど流通過程からひき出してきたが、これは全くの誤りである。独占利潤のなかにそのような流通過程での搾取が含まれることは疑いないが、独占利潤の基本的源泉はあくまでも生産過程そのもののなかにある。もしもこの点を忘れるならば、「独占資本主義の流通主義的ならびに帝国主義的な寄生と頽廢だけが一面的に強調されて、その反面においてそれがその傾向にもかかわらず生産力を進歩させることにより社会主義を準備しつつある側面が軽視されることになり勝ちである」(2頁)。

独占利潤の生産過程的把握こそ白杉教授の主張の核心であるが、それは具体的にはつぎのように説明される。自由競争時代においても資本家は最大限利潤を追求して行動するが、まさに自由競争をつうじて利潤は平均化される。そこでは、改善された生産方法を採用した資本は特別剰余価値をうる事が出来るし、それが最大限利潤の源泉となるのだが、その生産方法の普及するにつれて特別剰余価値は消滅する。すなわち、自由競争段階では、長期的には平均原理が作用している。これは間違いない。だが、平均化の過程は当然時間的経過を必要とする。資本主義的生産がまさに無政府的生産であるために、平均化される過程では、換言すれば短期的には、「社会の総労働時間が総生産物にたいし平均化されるかわりに、むしろ、すべての生産物の個別的必要労働時間が限界労働時間にむかって平準化される。各生産者の個別的な平均必要労働時間が社会的に平均化されるのではなくて、すべての個別的必要労働時間が与えられた範囲内で最高の——したがって限界的な——必要労働時間にむかって平準化されるのである」(15頁)。これこそ、「平均原理ではなくて限界原理の支配」なのである。そしてこの限界原理の支配の結果、「そこではすべての種類の生産物の1部分が多かれ少かれ1種の……虚偽の社会的価値をもたされ」(15~16頁)るのである。周知のように、マルクスは『資本論』第3巻第39章において差額地代に関連して「ある虚偽の社会的価値」についてのべている(第3章で差額地代との関連がとりあげられているのはこのためである)が、教授によれば「虚偽の社会的価値」の存在はなにも土地生産物に限られない。たしかに、工業においては、それは個別的経過的であったが、限界以上の生産条件をもつすべての生産者に特別剰余価値の形で、1種の「虚偽の社会的価値」が帰属するという点では、それは農業の場合となんら異ならない。

さて、産業資本主義の時代にも限界原理の部分的支配を確認しておけば独占資本主義のもとでの限界原理の支配の確立は容易である。自由競争の時代には、特別剰余価値は競争をつうじて長期的には消滅の運命にあったが、いまや独占資本主義のもとでは、独占資本は資本の自由な移動を全力をつくして阻害することにより(もちろん生産設備の巨大化・高価化という事情も加って)、新しい生産方法にともなう特別剰余価値は固定化されるようになる。つまり、かつては平均原理に従属していた限界原理が、逆に平均原理を支配するにいたる。したがって、農業において虚偽の社会的価値についていわれたことがそのまま適用しうるようになる。このように固定化され

た特別剰余価値は、もはや言葉の本来の意味における特別剰余価値ではなくなり、いまや独占的剰余価値と名づけられねばならない。かくて、教授はつぎのようにまでいわれる。「そのさい特別剰余価値の生産を独占的剰余価値のそれにまで固定することは、1個もしくは少数の企業が、当該生産部門において他の諸企業の追随しえないような——それらの競争を封殺するような——特別の生産条件をもつことによって可能となる。もちろん他の諸企業の競争を封殺する条件としては、特許権その他の法的制限がないではないが、しかし現代資本主義のもとで最も重要なのは優秀にして巨大な生産設備をもつことである」(28頁)。

本書における白杉教授の主張を最も簡約化すれば以上につきる。それは第1章のうちでも第1節に集中している。第2節、第3節はいわば第1節の展開であり補論である。たとえば、第2節においてヒルファディングのカルテル利潤論やセレブリャコフの独占価格論を批判しているが、その論拠は第1節の主張である。

教授は本書のなかで教授の議論に加えられた平瀬教授はじめ多くの経済学史学者の批判に答えられている。筆者のような『資本論』解釈に不案内な者が教授を内在的に批判しようとしても、それは屋上屋を重ねることにもならないだろう。それで多くのすぐれた学者が教授の遺志をついで独占理論の研究を深化させることを切望する意味において、現代資本主義の現状分析に携る者として筆者は敢て非礼をも願みず超越的な批判・感想をつぎに述べさせていただきたい。

本書を読んで筆者のえた最大の疑問は、教授が独占利潤の生産過程的把握こそ独占資本主義についての正しい現実認識に到達する途であるといわれている点である。たしかに、独占利潤の源泉をもっぱら流通過程での搾取に求めるのは正しくない。ところが、教授の生産過程的把握によると、結論的には「優秀にして巨大な生産設備によって競争を封殺しようとするところに現代的独占の特徴がある」(28頁)ということになるのだが、果してこれによって「それのもつ肯定面と否定面とが正当に認識されうる」だろうか。たしかに、現代的独占は経済外的な規制によって独占を確立しているのではない。だが、「優秀にして巨大な生産設備」に目を奪われるならば、たしかにそれらによって生産力の発展が可能となることにのみ重点をおくならば、独占資本主義の肯定面だけ強調されて否定面は出てこないのではなかろうか。生産過程での搾取は肯定面で、流通過程での搾取は否定面だと分けられもしまい。この点が明確にされないと、「それを

初めから簡単に停滞的頹廢的なものときめてかかることなく、停滞と頹廢とをともないながらも、なおそれが将来社会への準備を強力に推進しつつあることが認識されうるであろう」(28頁)という教授の指摘が経済理論としては説得的に聞えないのである。

この点で筆者が残念に思うのは、教授がレーニンの『帝国主義論』にふれることの余りにすくないことである。もちろん、教授はレーニンを全く無視しているわけではない。差額地代についてのレーニンの引用を別としても、『帝国主義論』から数箇所引用されてはいる。しかしそれは例のスターリン論文で否定された命題——すなわち、腐朽と停滞にもかかわらず、全体として資本主義は以前よりもはるかに急速に発達する——である。この命題を復活させるだけでは、レーニンの真意に充分そっているとはいえないだろう。たとえば、レーニンは独占と非独占とのあいだの競争についてつぎのように述べている。「われわれのまえにあるのはもはや、小企業と大企業との、技術的におくれた企業と技術的にすすんだ企業との競争戦ではない。われわれのまえにあるのは、独占に、その抑圧に、その専横に服従しない者が、独占者によって絞め殺されるという事実である」(『帝国主義論』副島訳34頁)。独占利潤の基本的源泉を生産過程に求めるということによって、もしも教授のいわれるような「優秀にして巨大な生産設備」にしか到達しえないとしたら、われわれは独占利潤の源泉についての生産過程的把握の有効性を疑わざるをえない。

不幸にしてわれわれは教授の雄大な構想の序説しか聞けなくなった。教授にして御存命ならば筆者のような門外漢の超越的批判にも懇切な教示がえられたであろうに。本書の書評が教授への追悼の辞となったことを本書を書評した多数の学術雑誌書評子は遺憾としているが、生前教授の声咳に接することのなかった筆者すら哀悼の念の痛切なるものがある。 [佐藤定幸]

越村信三郎

『マルクス主義計量経済学』

東洋経済新報社 1961年9月 211ページ

本書は、著者の越村氏が戦前から一貫して試みつづけてきた『資本論』体系の数学化の諸成果を集大成したものである。氏の業績については多言を要しないであろう。氏は、わが国では再生産表式を行列で表示することを発案した最初の人であり、レオンティエフとはほぼ同じ時期に、「独立に、彼の投入=産出表……の基本方程式